Venture Scout

●ベンチャースカウト

ほんの少し遠くへ。自転車で自由への第一歩

まずは、身近にある自転車をこいで、出かけてみようではないか。どこへ続いているのかわからない目の前の道を走ってみようではないか。何年かけても走りきれないほどの、地球という大地は、ここから続いているのだから。

はじめて自転車を手にした少年時代のあのとき、僕の旅ははじまった。まだ見知らぬ隣の町までこいでいったのだった。

案の定、帰り道がわからなくなり、暗くなりはじめた見知らぬ町で、泣き出しそうになる自分を励ましながら、こいだのだった。

そしてそのとき、ちょっとばかり大げさにいえば、僕は「遠く」という場所が存在することを感じ、世界は計り知れないほど大きく、自分の町は小さなものでしかない、と知ったのだ。ずっと憧れていたどこまでも続く道が、目の前にあらわれた気がした。そして、思ったのだ。もっとこげるようになったら、この町を出て行こう、と。

特別なものは、なにもいらない。いま持っているおんぼろ自転車でいい。それをいつもと違う方向へこぎだせば、旅がはじまるのだ。

ただし、ちょっと駅まで、と乗っていたときとは、気持ちを変えるほうがいい。自転車を、日常の便利な道具としてではなく、苦楽をともにする旅の道具、というふうに見る。そうした目で自転車を見ると、漠然と知っていた自転車のことがよくわかってくる。すると、ギアに油を差してやろう、パンクや簡単な修理は自分でできるな、と思えてくるのだ。

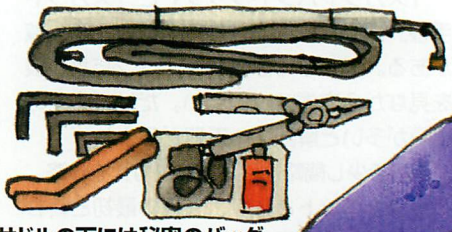
そうなれば、しめたもの。

さっそくこぎだしてみよう。まずは隣の町まで。そして、さらにはそのちょっと先まで。

旅の途中には、もううんざりするほどの登り坂が続くかもしれない（人生は下降気味なのに、自転車に乗ると登り坂が続くものだ）。激しい雨に打たれることがあるかもしれない。しかし、もうちょっと遠くへ、もうちょっと、もうちょっと、とこぎ続けると、よくがんばったといわんばかりに、目の前には大きな風景が広がるのだ。息を吸い込むと、そのまま肺まで染まってしまいそうなオレンジ色の夕焼けに包まれるのだ。

冬でも登りは汗をかく、夏でも下りは寒さを感じる

1・綿素材は乾きにくく、汗をかくと寒い。肌着は化学繊維の速乾性のものを選ぶ。
2・中間着としてフリースのシャツ、それにタイツ。
3・ベストは、動きやすく温度調節もしやすい。自転車旅にはベストチョイスなのだ。
4・風に悩ませられることが多い旅である。アウターには風を防ぐジャケットを。

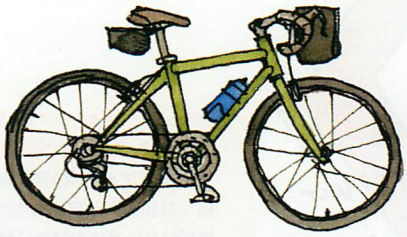


サドルの下には秘密のバッグ

使いたくはないけど、持っていかなければならないものがある。小さなバッグに、パンク修理道具と、自分の修理（肉体的にも精神的にも）のためのキットを押し込んでいこう。

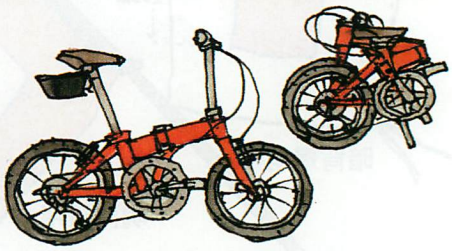
山を走るために生まれてきた自転車、その名もマウンテンバイク（MTB）

まず目をひくのがタイヤの太さ。買い物自転車の倍近くもある。このごつごつのタイヤが、砂利道だろうが、ぬかるみだろうが、岩だらけの道だろうが、がっちりとつかんで進んでいく。MTBはその名の通り、山を走るのが得意な、ワイルドな自転車だ。舗装路から外れ、道なき道を進むことで、すてきに人の道を踏みはずしているようで、気分がいい。地球のでこぼこが、そのまま体感できるのだ。



アスファルトを走るためだけの自転車もある

山道を走るためのものもあれば、アスファルト道専用の自転車もある。細いタイヤを持つロードバイクと呼ばれるものだ。舗装された道をいかに楽に、いかに速く走るか、を考えて作られた自転車だ。なので、ロード専用のものは旅には向かない。いろんなところへ出かけたいなら、クロスバイクとか、シティバイクといったオールマイティな自転車を選べばいい。



気軽に手軽に旅へ出かけるための折りたたみ自転車

船や電車やバスなどの乗り物に自転車を手荷物として持って乗れるのが、折りたたみ自転車だ。他の乗り物と自転車を組み合わせると、機動力が大きく広がる。しかも、目的地を前に疲れたからバスを使おうなどと、旅の自由度もぐっと開ける。小径ホイールなので自転車としての機能は、MTBなどとは比べられないが、この手軽さ気軽さは捨てがたい。新しいスタイルの旅が手に入るぞ。

身を守る道具をおろそかにしてはいけない

自転車で遠くへ出かけるなら、ヘルメットとグローブは必需品だ。自分の身を守るための道具は、しっかりと身につけよう。目を守るために、めがねかサングラスもほしい。

なにを入れるかを考えるだけでも楽しい

いつでもすぐに取り出したいものの収納は、ハンドルに装着するフロントパックを使うと便利だ。なにを入れるかは旅人の想像力次第。雨具やウインドブレーカーなどのアウターウェア。財布。携帯電話。ライト。地図とコンパス。メモ帳。旅先でのスケッチ用の道具。行動食。カメラ。他にも自分の遊びのスタイルにあったものを入れるといい。パックは専用のものがほしい。ハンドルにきっちり装着できないと、走っている最中に痛い目に遭うぞ。

やばい！ってなときはレザーマンね

あるアメリカの青年が旅の苦い思い出から作り出したマルチツールが、ペンチを内蔵したこのレザーマン。自転車旅には、機能美あふれるこのツールが一つあると重宝する。細かな修理はもちろんだが、なんたってペンチはなべ掴みにもなるのだよ。

体に密着、がバックパックの絶対条件

キャンプ道具を入れるとなると50リットルクラスのバックパックがほしい。しかも、しっかりと体にフィットするもの。背中でバックパックがぐらぐらすると、旅の楽しみまでが揺らいでしまうのだ。

ライト&ファーストがキャンプ道具選びの基本だ

自分で背負っていくのだから、キャンプ道具は必要最小限のものだけにしたい。そして、道具は軽いものを。テント、寝袋、マット、小さなストーブ、お茶セット。それだけあれば、まずは人のいないところへいって一晩を過ごすことができる。シンプルな道具であればあるほど、自然の懐奥深くへ入っていける、ということを知る夜となるはずだ。

地図はいつまでも飽きない読み物だ

現場でも計画をたてるときにも、重要なものである。と同時に、地図が一枚あると、旅の夢はどんどん広がっていく。だから地図は必需品というよりは、嗜好品に近いものかもしれない。計画をたてるときには、地図を穴があくまで見て、坂の多さを知ることだ。無理をしないように。

ベンチャースカウトのみなさんへ

●ライト類をそろえておこう

いつもより遠くへでかけるなら、灯火類を必ず用意。夕方は早めに点灯。前は白、後は赤のライトが原則。視界確保よりも、「自転車がいるぞ」と歩行者や車に知らせるのが大切。だから点滅式ライトがよい。100円ショップ等でも手に入る。

●自転車は車道を走るべし

自転車は道路交通法では車道通行が原則だ。でも多くの歩道は「自転車も通行可」となっている。交通の激しい幹線道路では歩道にお邪魔しよう。その際、歩道は歩行者が主役。あくまで歩行者優先で、「失礼しま～す」という態度でいこう。

■文：堀田貴之／イラストレーション：伊東孝志